

# 修学旅行

## PLAYBACK

### 34年ぶりの浄蓮の滝

「一寸前なら憶えちやいるが一年前だとトト判らねエなあ」という歌が流行っていた高校時代。

今では、ちよつと前のことすらなかなか思い出せないけれど、昔のことだけはよく思い出せる年代になってきた。

ヨコスカにも、ましてやヨコなる女性にも縁はないが、岡山を離れて30余年、僕は今横浜市に住んでいる。

幸か不幸かレコード会社に就職した僕は、高校時代のヒット曲はもちろん、多くの歌手のいろいろな楽曲を、生で聴く機会に恵まれた。

1986年のヒット曲「天城越え」もその一つで、この歌を聴くたびに、歌詞に出てくる「浄蓮の滝」が妙に気になっていた。

僕ら昭和51年卒の修学旅行は、伊豆箱根への2泊3日の旅だったのだが、そこは横浜からはかなり近いこともあって、あれから何度も伊豆箱根方面へ行った。

当時の宿泊先である小湧園や下田のホテルにも泊まったし、箱根や伊東などは毎年行っているほどである。ところが、不思議なことに天城峠から浄蓮の滝へ続く中伊豆だけは、修学旅行で行って以来一度も行ったことがなかった。

伊豆箱根の中で浄蓮の滝だけが、僕にとっては常連ではなかったのである。

だからなのか、今年初めの中伊豆の修善寺温泉に行った僕は、そこへ行ってみようと書いた。

当時は、下田から天城峠を越えて三島駅に行く途中、昼食のため「浄蓮の滝」に寄るといって最終日のおまけみたいなスケジュールだった。

滝へと降りる道も狭くて、グループに分かれて降りた。滝は目の前で見たのだが、人が多すぎて、しかも見学スペースも狭くて、窮屈で写真を撮るのにも苦労した。

ただ、修学旅行最後の観光地であったことと昨夜の盛り上がりもあって、みんなのテンションも上がっていたと思う。そういえば、前夜僕らは旅館を抜け出して、同じクラスの「アマゾン」や「いや、美女軍団と海岸に行っただよな。（行っただけです。）

案の定、やはり2人で並んで歩くには狭くて細い峠道を降りること約5分。流れ落ちる滝の音がだんだん近づいてきて、やがて「浄蓮の滝」が現れた。

デジカメやケータイはもちろんだが、捨てるカメラスらなくて、自分のカメラで撮影しては焼き増ししたり、友のカメラで撮ってあげたりしたあ



のころ。

滝は、もちろん音を立てて流れていた。そして、友とみんなが記念撮影したときの大きな樹木や、美女軍団と一緒に撮ったときの見覚えのある大きな岩もあった。

ただそこには、あのときは違うものもあった。当時あるはずもない「天城越え」の歌碑と、それを無邪気に携帯で撮っている妻の姿である。

僕は34年という年月の重みをかみしめながら、ここに再び来られたことへの喜びを感じていた。

そして歌碑を眺めながら、心の中でカミさんにつぶやいた。たまには言ってみてよ。

「誰かに盗られるくらいならあなたを殺していいですか」と追記

当時の修学旅行2泊目下田温泉にて、そのままでもそっくりなのに、麦色のジューズのせいなのか、さらにゆでだこみだいに赤くなつたお顔でワシはききょう、これを最後に、もう見回りに来ないからな。」と言っていた

だいた先生をはじめ、それぞれ言葉で最後の宿泊日の見回りを緩和していただいた先生方に、昭和51年卒を代表して、34年ぶりに、御礼の言葉を述べさせていただきます。

どうも ありがとうございま

(昭51卒 尾形靖博)

### 朝日高の修学旅行略史

朝日高に入学したとき、他校のような修学旅行はないと先輩から聞かされ、がっかりしたの

をおぼえている。修学旅行を派手にしないのが、朝日高の伝統のようであり、簡単にその歴史をふりかえってみよう。

昭和23(1948)年、新制高校として朝日高が誕生してから、初めて修学旅行が行われた

昭和35年まで、12年もの歳月が必要だった。この事情については、太田進先生の「学校行事から見た朝日高の修学旅行の形成」(朝日高高等学校校史資料)5集、1978年に詳しい。

それによると、朝日に修学旅行がなかったのは、昭和初期に修学旅行を中止した、岡山一中の伝統といつことである。「学生から学を取つたらセイしか残らん」という当時の生徒課長の言葉が象徴するように、学生の本分は勉強というのが一中と朝日の信条だった。

一方、二女は修学旅行を行う伝統であったため、女子のみの修学旅行を、との提案もあった。進学しない女子で卒業式の直前にという限定付きで、男子は進学しない者もふくまなかった。

草創期の朝日は極端な進学中心主義で、自治的な生徒会もなかった。30年ごろから生徒会の活動が活発になり、次第に学校批判の声が高まっていった。修学旅行も生徒側の要求のひとつであり、34年暮れに原田親校長の仲裁で教師と生徒の対立を収め、ようやく翌年宮島への1泊旅行が実現したのである。

その後の修学旅行の変遷については、後神俊文先生の「覚書・岡山朝日高校の修学旅行(1)」(岡山朝日高等学校校史資料)第2集、1998年)が正確に記している。これによると、基



本的には宮島旅行が定番であったが、37年には高知、39年には奈良を目的地に選んでいる。高知のときは、フェリーが濃霧のため運航できず、帰宅時間が大幅に遅れ翌日の未明に及んだ。また、42年には宮島の弥山登山中に滝の上から転落して、生徒一人が重傷を負つ事故もあった。

宮島旅行は当初1泊2日で、広島平和公園も見学していたが、45年から2泊3日になり、平和公園のかわりに秋芳洞や錦帯橋を見学して湯田温泉に1泊するようになった。

48年、わたしたちの学年が1年の時、担任の先生たちのあいだで修学旅行の行き先について話し合いがあった。端的にいうと、先生方は宮島に飽いておられた。そこで、新しい目的地として伊豆・下田・箱根が選ばれたのである。

新幹線を利用して2泊3日の旅は、朝日高の修学旅行のなかでは豪華版で、宮島から方向転換したという意味でも画期的な学年だった。これ以後、宮島への修学旅行は行われず、行き先は関東・信州方面がしばらく続いた。平成8年には北海道、14年には沖縄が韓国と、目的地は海外にまで広がったが、2泊3日というのでは変わっていない。時代にあわせて豪華になって、学業優先という朝日の伝統は守られていくようである。

(昭51卒 光田京子)